The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	野溝七生子のギリシア志向とシルクロード : ギリシア趣味がシルクロード幻想に結実するまで
Author(s)	福島, 萌木
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2022, 6, p. 23-26
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89316
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

野溝七生子のギリシア志向とシルクロード

―ギリシア趣味がシルクロード幻想に結実するまで―

テクスト環境論　博士前期課程１年
福島　萌木

1.はじめに

野溝七生子（1897-1987）は、作家・比較文学研究者であり、当時のジェンダー規範を越えて活躍した人物として知られている。「永遠の少女」という呼称が示す通り、野溝評は概ね少女論に収斂され、野溝の論文について考察を加えた先行研究は、管見の限り存在しない。研究者としての野溝像は少女のイメージから逸脱するため、等閑視されてきたのは自然なことであろう[1]。

研究者としての業績は忘却されてきたが、論文「シルク・ロード」(1957)は日本におけるシルクロード像の転換点を示唆している。一般に、ＮＨＫの特集「シルクロード」（1980）を契機にシルクロード・ブームが引き起こされたとされるが、起源は明治期以来のヘレニズム東漸説[2]に遡る。戦時期においては興亜論を刺激し、敗戦を経て1961年の東京オリンピックの聖火リレー案において、シルクロードは復活を遂げる。したがって、野溝のシルクロード論文はその過渡期に位置づけられ、日本におけるシルクロード像の変遷を論じるにあたり、重要な位置を占めるだろう。本発表では、野溝のシルクロード論文に着目し、そのギリシア趣味を前後の文脈から論じることで、貫戦期におけるシルクロード像の断絶や継承について明らかにしたい。

2. 論文「シルク・ロード」(1957)におけるシルクロード幻想

1940年に開催された正倉院御物展にて、ギリシアの「エレメント」を継承した竪琴を発見したことが「シルク・ロード」の執筆動機となったという[3]。神話や伝承を豊富に引用し、記紀には「古代ギリシアのエレメントとなるものの萌芽」が見られると結論づける[4]。

ここでは、シルクロードを通して東西の文学を同一の起源から論じようとしたことが窺える。これは野溝の小説にも通じることだが、世界各地の文学作品を引用し、一

---

[1] 高原(1999)によれば、野溝は神話的に語られることの多い作家であるという。(高原英理、1999、『少女領域』国書刊行会 p.22)　野溝に対する神話的見解も、野溝研究が停滞した一因であろう。

[2] ヘレニズム東漸説については、井上章一『法隆寺の精神史』(1994、弘文堂)を参照した。

[3] 野溝七生子（1957）「シルク・ロード　古事記における印欧語族（ギリシア）的なもの―比較文学の一方法による―」『東洋大学紀要』(10) pp.67-81

[4] 同上

つの叙事詩として描く[5]ことを目指した形跡が認められる。

論理の飛躍、叙情的な文体、反証可能性の乏しさなどにおいて、論文としての妥当性には疑念が残るが、当時の駐日パキスタン大使から賞賛を得たという[6]。1959 年からは、東洋大学のアジア・アフリカ研究所の研究員を兼任するようになったことからも[7]、野溝のシルクロード論文が一定の評価を得ていたことが窺える。

ここで、野溝が強調するギリシア憧憬について触れておきたい。論文「シルク・ロード」の執筆動機は、正倉院御物にギリシアの要素を見出したことにあると野溝は述べるが、このようなギリシア憧憬は、『山梔[8]』から継承されるものであった。女性規範を拒絶したことで家族から孤立する主人公・阿字子は、血縁関係を否定し、「希臘の独り子[9]」と自称し、ギリシアを自らの故郷とみなす。このような野溝のギリシアへの憧憬は、日本ギリシア趣味の延長として捉えることも可能であろう。

３.近代日本における文化伝播論と日本人起源説

ここで、当時のギリシア趣味や日本とギリシアの同一起源論について、先行研究を参照し、整理したい。ギリシアに日本文化の源流を見出す見解は西洋由来のものであった。谷田（2004）によれば、イギリスの日本趣味において、開国直後の日本をギリシアのアナロジーから捉える例は多数存在するという[10]。ギリシアと日本のアナロジーは美術史研究を刺激し、日本の学界においても同様の見解が散見されるようになった。井上（1994）によれば、フェノロサやドレッサーは正倉院御物にギリシア、ローマ、ペルシアといったユーラシア西方に見出したという[11]。このような見解は、法隆寺壁画にギリシア東漸の痕跡を見出す議論を刺激し、ギリシアの文化伝播論は日本国内においても広がりを見せた[12]。

このヘレニズム東漸説に先行して存在していたのが、日本人西洋起源論である。田口卯吉らが提唱していた日本人アーリア起源説は、対西洋へコンプレックスを示すものであった[13]。日露戦争に勝利後、日本が帝国主義を拡張させると、このような言説

---

5 小平(2010)によれば、このような姿勢は長編『眉輪』において顕著であるという。眉輪王の変を、古今東西の物語とともに語り直そうと試みたのである。(小麻衣子、2010、「蒼白き光芒 ：野溝七生子「眉輪」を読む」、『日本文学』59 (7),pp 68-72)

6 『野溝七生子作品集』(1983、立風書房)　あとがき　矢川澄子 p.605

7 『野溝七生子作品集』p.588　野溝の主な研究テーマは、比較文学的見地からの森鴎外論であり、アジア・アフリカ研究所とは直接関係しない。つまり、研究所への着任は、シルクロード論文の評価を反映しているといえるだろう。

8 橋本のぞみ（2010）「野溝七生子『山梔』―<美しき魂の復活へ向けて>」、西原志保(2015)「野溝七生子『山梔』における山梔と白百合」において、『山梔』におけるギリシア神話の効果について考察されている。しかし、論文「シルク・ロード」に連なるギリシア憧憬については考察が及んでいない。

9 『野溝七生子作品集』p.226

10 谷田博幸（2004）『唯美主義とジャパニスム』名古屋大学出版会 pp.96-108

11 井上章一(1994)『法隆寺の精神史』弘文堂 pp.38-43

12 前掲書 pp.48-56

13 前掲書 pp.103-108

は徐々に消滅した[14]。

野溝作品におけるギリシア志向や論文「シルク・ロード」は 1920 年頃には、ほとんど否定されつつあったギリシア東漸説や日本人西洋起源説を肯定している。さらにいえば、論文「シルク・ロード」は、木村鷹太郎の唱えた日本神話論にも重なる。プラトン翻訳で知られる木村鷹太郎は、日本神話がギリシア神話に先行して存在しているとし、世界太古史の刷新を試みた。木村が根拠としているのは、地名や人名の稚拙な言葉遊びであり、荒唐無稽な論と言わざるを得ないだろう。

もちろん、野溝は木村のように過激な論を呈するわけではないが、ギリシア神話と日本神話の共通性に触れることで、古代史の再編成を試みている点で共通している。その意味で、野溝の論もまた、西洋との相克のなかで生まれた文化論[15]に基づいて成り立っているといえよう。

4. シルクロード像の変遷と野溝論文

シルクロードに付随するイメージの変遷についても触れておこう。「シルクロード」という語もまた、日本の興亜論を正当化するために使用されていた。湯本昇による中央亜細亜横断鉄道構想は、その最たる例である。中央亜細亜横断鉄道構想は、中国の包頭あるいは西安を起点とし、中央アジアを経由し、バグダッドを終点とする鉄道計画である[16]。「常に絹街道、仏教街道等平和使節の往復にのみ使用された由緒正しき街道[17]」を復活させる計画とされるが、実態は平和とかけ離れたものであった。イギリス領やソビエト領を経由せずにドイツと接続すること、沿線のムスリム住民を懐柔し、防共の壁を設立することが主な目的だったのである。

中央亜細亜横断鉄道が実現することはなかったが、東京オリンピック(1964)の聖火リレー案で復活を遂げた。舞踏家・伊藤道郎は、ギリシアから中東、中央アジア、中国を経由し、日本に聖火を届ける計画を発表した[18]。現地の情勢や気候の問題から計画は頓挫したが、この聖火案は中央亜細亜横断鉄道構想をなぞるものである。

野溝の論文「シルク・ロード」は、終戦を経てシルクロード像が復活するまでの過渡期に発表された。つまり、戦後のシルクロード像の嚆矢といってもよいだろう。一方で、野溝の論文は同時代のシルクロード美術再評価の潮流を受けて成立しているとも捉えられる。

---

[14] 同上

[15] 野溝が西洋による対日本のまなざしを内面化していた例として、短編「奈良の幻」(1928)を挙げる。フランス人トリスタンが書簡形式で、少女・クノへの恋慕を綴っている。日本人女性が官能的に描かれている点や日本人女性による語りが許されない点など、オリエンタリズム小説の典型を反復している。

[16] 湯本昇(1939)『世界平和鐵道としての中央アジア横斷鐵道』ワット 12(10) pp.4-7

[17] 湯本昇（1939）『中央アジア横断鉄道建設論：世界平和への大道』東亜交通社 p.272

[18] 1961 年 1 月 1 日読売新聞朝刊 7 面「東京五輪の基礎工事　ことしから本腰　聖火コースも決まる？▽選手強化も拍車」伊藤による聖火リレーの提言については、夫馬信一(2021)『緊急事態 Tokyo1964 ：聖火台へのカウントダウン』みずき書林 pp. 32-39 に詳しい。

野溝の「シルク・ロード」が発表された 1957 年は、中央アジアの遺跡発掘で知られるドイツの考古学者ル・コックのコレクションが発見された年である[19]。戦争による焼失が疑われていたル・コック・コレクションは、パリのギメ東洋美術によるガンダーラ美術展で展示された[20]。

ル・コック・コレクションの例からも分かるように、戦争からの復興によってシルクロード美術の再評価が進んだ時代が、1950 年代後半なのである。日本においては、敦煌美術の再評価が進む。1955 年に設立された日本中国文化交流会によってソフト面での交流が再開したことが、敦煌美術再評価の原動力となった[21]。

野溝のシルクロード論文を駐日パキスタン大使が評価したこともまた、戦後の国際的な潮流を示唆するだろう。論文はギリシアとの類縁性に着眼したものだが、「シルクロード」という語を使用した点に好感を持ったのであろう。ガンダーラ美術と不可分の関係にある「シルクロード」はパキスタンのソフトパワーを誇示するものであった。事実、パキスタン教育相が日本におけるガンダーラ美術展の開催を要望したという報道もある[22]。

シルクロード美術の再評価は、戦後からの復興や第三世界の誕生に伴い引き起こされた世界的なムーブメントであった。つまり、論文「シルク・ロード」は戦後によって再編される世界秩序をも映し出すのである。

5.おわりに

本発表では、野溝七生子の論文「シルク・ロード」を中心に、戦前のユーラシア幻想、戦時期の興亜論がシルクロード幻想として書き換えられる過程について論じてきた。従来の野溝研究では、論文「シルク・ロード」は看過されてきたが、シルクロード像の転換点を示している点で画期的であった。

野溝はデビュー作『山梔』以来、ギリシアへの憧憬を描き、戦後は論文「シルク・ロード」（1957）において、ギリシアと日本の文化的淵源が同一であることを示そうと試みた。野溝の論は一見すると、単なるギリシア趣味のように見えるが、実は帝国主義や国粋主義と結びついたユーラシア論を反復している。一方で、日本文化の優位性が示されていない点で、戦前のユーラシア論と大別される。ここで示される西方文化との文化的同一性は、戦争から復興と第三世界の誕生による世界的なシルクロード美術の復興運動にも繋がる。つまり、論文「シルクロード」(1957)は戦前のシルクロード像をいくつかの面で継承しつつ、大戦後に再編された世界の趨勢をも反映していたのである。

---

19 秋山光和「ル・コック・コレクションの復活」（ル・コック、1960『中央アジア発掘記』木下龍也 訳 昭森社）pp.251-252

20 同上

21 榎本泰子(2021)『「敦煌」と日本人　シルクロードにたどる戦後の日中関係』中公選書 pp.37-40

22 1960 年 1 月 18 日読売新聞朝刊 2 面「来年は日本でガンダーラ仏跡展　パキスタン教育相語る」翌年、日本でパキスタン古代文化展が開催された。